

# ひまわり訪問看護ステーション

**症 例 概 要**    利用者氏名：T・R様（20代 男性）  
利用期間：平成31年4月～令和元年6月中旬  
病名：両側性慢性硬膜下血種・糖尿病・レビー小体型認知症

経過：2017年5月、高所より転落し、A病院へ救急搬送された。頸髄損傷と診断され、2ヶ月半保存治療を実施。その後、廃用症候群のため同年8月にB病院に転院となった。約3ヶ月入院後、同年11月に退院となる。その後、ひまわり訪問看護ステーションの訪問サービスを利用し、看護師による状態確認や排泄管理、リハビリスタッフによる関節拘縮予防、身体機能向上運動、基本動作練習を行っている。

Tさんの性格は物静かで自分の気持ちを表に出すことが少ない方。ご家族は介護初心者で介護に対する不安を抱えている。

## 内 容

リハビリでは、比較的機能が残存している左上肢の随意性向上とともに、Tさんが1人で行える動作を増やすことを目標として介入している。その中で、どの動作に介入していくか思案していた。その際、別の曜日に訪問をしていた脊髄損傷を患った方のご家族(以降、ご家族Aさんとする)と話す機会があり、長年介護を行ってきた経験上、自立・軽介助で行えた方が良い動作のアドバイスを頂き、今回は飲水動作に着目した。

ご家族Aさんは、Tさんのご家族と交流があり、介護暦も長いいため、Tさんのご家族から相談を受けるなど連絡を取り合っている。

Tさんが水を飲む際、以前はお母様を呼び、ペットボトルを口元まで持ってきてもらいストローで飲んでいた。飲水動作に対して、Tさんから直接意見などを話すことはなかったが、お母様より、「(Tさんは)水を飲む度に私(お母様)を呼ぶことに気を遣ってしまっているんじゃないか」、というお話があった。お話の中で、Tさんとお母様共にお互いに気を遣っている様子が見られ、両者の気持ちを軽くすることを目的として、飲水動作に介入していくと決めた。

Tさんの身体機能上、上肢を利用して飲水することは困難だったため自助具を作製した。自助具の作製に関しては、「作製コスト」、「ご家族が簡易的に扱える(セッティングなど)」、「Tさんが不自由を感じない」の3つをテーマに挙げ作製した。自助具は訪問時に試用を行い、評価を行った後に日常生活で使用して頂いた。その後、訪問時に使用感について定期的に確認を行った。

使用感についてTさんに質問した際、Tさんは「ノーコメントで。」と笑いながら話していた。お母様からは、「(Tさんは)凄く気に入った様でスマートフォンを見る時はいつも使っていて、1人で水を飲めるようになったことに、満足していると思います」、とお話をされており、お母様自身も安心されている様子が見られた。

自助具を作製したことで、Tさんの行える動作が増えと同時に、Tさんとお母様の精神的負担の軽減にも繋げることが出来た。Tさんの残存機能は少ないが、道具を利用することで出来る動作を増やすことは可能であり、ご家族の介護負担の軽減にも繋がるため、今後も状態に合わせた自助具の作製は続けていく。